

安原地区史跡巡り

安原地区歴史研究会

安原地区の江戸時代から現代までの歴史をたどる

安原地区は江戸時代からの町割りで、武家地と町屋が八町会、そして明治時代から三町会が集まり、形成されました。

それぞれの町会の成り立ちや文化財、ここから輩出した人物像などをたどります。

I、江戸時代初期～幕末 町の成り立ち

★江戸時代の安原地区

(1) 武家地

イ 袋町、新町

- ・鍵の手
- ・安東家腕木門(うでぎもん)

ロ 両下町、天白町、中ノ丁、東ノ丁、萩町

- ・町割、天白神社、橋倉家住宅、矢野家の土塀(どべい)と井戸跡、辻井戸跡

(2) 町人地

安原町

- ・十王堂、常法寺小路

(1) 武家地

★武家地に残る史跡

- ・袋町の由来
- ・袋町の鍵の手
- ・新町の由来
- ・一里塚跡
- ・木戸と番所
- ・中ノ丁跡
- ・両下町の旧道
- ・天白神社
- ・橋倉家住宅
- ・矢野家の土塀(どべい)と井戸跡
- ・安原地区の辻井戸の歴史

袋町の由来



水野忠直の時代(慶安ころ:1648~1652年)に造られた城外武家屋敷跡地で、江戸時代の終わりころには60石取り前後の武士が住んでいました。この町は、南が入口で、中ほどには「鍵の手」などがあり、北端は行き止まりという袋小路になっていたので、袋町と呼ばれた。右図は、袋町の安東家腕木門(うでぎもん)である。

(注)腕木門とは、二本の本柱を立て、これより腕木を出し屋根をかけた門である。

袋町の鍵の手



城下町には敵の攻撃を守るため、色々な工夫がなされていました。「**鍵の手**」
「**丁字路**」などである。**鍵の手**は、敵が攻めてきた時、道をクランク状に曲げ、
前方が見通せないようにしていた。

新町の由来



戦国時代甲斐の武田氏が一時深志城を拠点とし、武田氏が没後、小笠原氏が深志城を松本城に改め、城地の町割りを行いました。その後、石川数正らにより天守を持つ城郭が築造され、城下町が整備されました。

江戸時代になり寛永10年(1633)に越前大野より松本城に入った松平直政は、城内の北門より城外の北にかけて、中級武士の屋敷を二町造り、東側の通りを新町、西側の通りを田町と名付けました。新町は最高260石、最低72石取り武家屋敷で軒数は14軒でした。

松本城下 北の一里塚



幕末の一里塚図（北方向が下向き）



一里塚のあった萩町交差点

一里塚は、五街道の制度を整えた徳川家康が、一里（三六町）ごとに塚を築かせ、その塚の上に榎木や松を植え、一里の目安にしました。松本城下町、北の口に一里塚がありました。この一里塚が、松本城下北の基点になりました。この頃から善光寺街道が整備され、岡田宿・会田などに宿場を設けた。

木戸と番所



現在の「萩町」の信号のところに、江戸時代には木戸と番所がありました。

木戸は、在と城下の境界を固めるものであり、城下の入口にありました。

番所は、木戸の近くや辻、町中にあり、主な役目として、町人町の争いの調停、狼藉者の取り締まり、火の用心などに当たりました。

旧町名中ノ丁



城外武家屋敷があった町名。萩町の東に萩町と並行して東へ天白町、中ノ丁、東ノ丁と三筋の通りがありました。中ノ丁は、その真中で寛永19年(1642)に命名されたという。

両下町の旧道



当時の善光寺街道は、武家地であった和泉町から、宝永寺の前を西に折れて、安原横丁に入りました。和泉町から下下町に通じる道が両下町の道です。明治23年に、第二線路(国道143号線)が開通し、和泉町は分断され、この旧道が取り残されました。

天白神社



松本城を築いた[石川数正](#)が、松本城築城と同時に城の鬼門に当たる方位で侍屋敷の外に、[天白道場を開きました](#)。数正は祖父の時代から天白信仰者だったそうです。その後、道場は廃止されましたが、享保12年(1727)に岡宮社人により再興されました。

橋倉家住宅



橋倉家住宅は、松本城の東北に位置し、江戸時代から「東ノ丁」と呼ばれ、下級武士の居住地区にありました。現在の建屋は築170年(幕末)と言われている。本住宅は、武士の松本藩武家住宅を知る貴重な遺構である。玄関には、井戸の跡も残っている。

矢野家の土塀と井戸跡



「中ノ丁」の北端で、屋敷地の西側道路沿いに、簡易な切妻屋根の土塀(下部は板張り)がある。残っているのは長さ2mぐらいですが、隣家との間の目隠し用に建築されたものである。右の写真は、その塀の前にある共同井戸で、深さは5.58mで、2月頃の渇水期を除き、水深は2~4mで推移していた。

安原地区の辻井戸の歴史



新町緑地公園に、江戸時代の井戸の歴史を示す案内板があります。

現在使用されているのが40ヶ所、共同井示す戸跡が8ヶ所、辻井戸跡が16ヶ所、湧き水が2箇所あるそうです。特に、江戸時代には辻井戸は、主に武家屋敷にあり、藩が管理する辻々にもあったそうです。

(2) 町人地

★安原町

- ・安原町の由来
- ・十王堂
- ・常法寺小路
- ・旭町稻荷神社

安原町の由来



この地区は、古くは安佐端野(麻葉野:あさばの)原と、言われていたところでした。笠原貞慶が、天正12年(1584)に深志の地を松本と改め、地区割りがされ、善光寺街道沿いに町が造られました。町名の言われは、安佐端野原の前後の文字を取り、安原町と名付けたという。

安原町の十王堂



十王堂は、松本城を構築した石川氏により城下町の南・東・北口に建て、町民の安定と町内の鎮護を祈願したと言われている。

安原町十王堂は、松本城下町最北端の安原町の出入り口東側にありました。安原地区の十王堂は、松本十二薬師第四番札所です。現在は、跡地だけと堂標が建っている。

常法寺小路



「松本市史」には、「常法寺小路 横町北側ニアリ、長サ二十一間、幅七尺、木戸アリ、出入暮六ツ切り、此常法寺ハ山伏ナリ」と記述されている。
ここは、**木下尚江の小説「墓場」の舞台**にもなっている。

旭町稻荷神社



旭町稲荷神社は、旭町小学校の国道沿いの北側にあります。五穀豊穰、招福除災、商売繁盛など靈験あらたかな神社として庶民の信仰厚く祭られていた。創建は、江戸後期約200年前である。

Ⅱ、明治時代初期～現代 町の成り立ち

明治時代になると廃藩置県が始まり、この地は長野県となり、江戸時代に呼ばれていた「桐原分」「松本分」は、町村の改革により「松本分」は「桐原分」に統合されました。明治5年には、桐原分は桐村となり、中原、元原の地名がつけました。この頃、一般農家はほとんど養蚕で、水田は大門沢川に水を利用し、中原では馬の飼育が盛んだったようである。

安原地区 明治以後になって出来た町

★桐原分・松本分より桐村が生まれ、そこから中原町、元原町が誕生した

★中原町・元原町

- ・松本女子師範学校
- ・元原公民館
- ・美須々

★旭町：第二線路の開通により生まれ町

- ・松本五十連隊
- ・県蚕業試験場
- ・こまくさ道路

(注)第二線路は、松本一上田間の道路

松本女子師範学校



松本女子師範学校は、松本町大字桐字元原に、明治38年4月15日に開校しました。初代校長に矢沢米三郎を迎え、定員180名(5学級)でスタートし、厳しい規律の下、「人作り人を第一」に掲げ、人間性の育成、学問的研究活動に努めてきました。大正13年まで本校は続きましたが、その後変遷があり、旧制の師範学校は昭和26年3月に幕を閉じました。跡地は、現在信大教育学部附属小学校になっている。²³

元原町公民館



信大付属中学校の前には、元原町公民館が建っている。明治25年頃の造りと言われており、茶室もあり品格のある家でした。屋根の南側には、鬼瓦の亀模様になっています。この家は、一時、松本五十連隊の小西連隊長の宿舎になり、兵士が馬を牽いて送り迎えしていたそうです。

松本五十連隊



正門前(現信大正門)



信大構内にある倉庫跡

明治40年1月、五十連隊兵舎の設置が正式に決まりました。これには、全町挙げての誘致運動や、軍閥関係者で松本出身で参謀次長であった「福島安正中将」の尽力もあり誘致することができました。

松本五十連隊の射撃場跡



五十連隊の射撃場は、現在沢村公園になっている。その案内が、法務局前に設置されている。

県蚕業試験場



長野県の養蚕業は、いつの頃から始まったかはっきりしませんが、史書によれば今から1700年余年前と考えられます。江戸時代には、松本藩も養蚕を奨励し、安政年間には桑植木を配布したそうです。明治になり蚕糸の需要が増え、**県は明治40年(1907)に、県養業試験場松本支部を創設**し、配布用原蚕種の製造や技術者の育成を行いました。その跡地は、中原地区公民館になっている。

こまくさ道路



昭和 41 撮影のこまくさ通りの前



昭和43年に追分交差点から蟻ヶ崎まで、こまくさ道路が開通し、一帯は農村からロードサイドの商業・住宅地に変貌した。

左の写真は、昭和41年頃のこまくさ通りの前、右の写真は現在のこまくさ道路である。

Ⅲ、明治以後の人物

★鳩山春子先生

★近藤次繁先生

★鈴木鎮一先生

鳩山春子先生



文久元年(1861)に松本藩士渡辺幸右衛門(多賀努)と賢子の五女として松本市袋町(現北深志)に生まれる。明治7年(1874)13歳で上京し、1877年東京女子師範学校に入学する。その後お茶の水東京女子師範学校に入学し、卒業後同校に就職する。

1881年に鳩山和夫と結婚し、長男一郎を出産する。1886年に共立女子職業学校(共立女子大学)の創立に参加し、1914年には第6代校長となる。

夫の和夫を賢妻として助け、のちの鳩山一族の礎ともいべき存在であり、戦後、多くの子孫が政治、経済、学問の道で活躍し、長男一郎は第52～54代内閣総理大臣になる。

近藤次繁先生(1)



先生は、慶応元年松本に生まれ、松本市立病院の建設に尽くした、東京大学医学部教授でした。父親は松本藩士である鶴見次喬であり、次男として生まれる。後に愛知県で院長をしていた近藤担平の婿養子となる。

明治24年(1891)東京帝国大学医科大学卒業後、助手になり、その後ドイツ、オーストリア等に留学し、帰国後助教授、教授を経て、東京帝国大学医学部附属病院長に任じられ、大正14年(1925)に大学を退官した。

当時医科大学の近藤外科と言えばその名聲がとどろいていた。日本で最初に胃がんの手術を成功させた外科医である。

近藤次繁先生(2)



市立松本病院開院記念



開院時の小里市長(左)と、近藤次繁先生(右)

大正14年(1925)には、郷里松本市より翌年開業予定の市立松本病院(後に松本医学専門学校附属病院)名誉医院長兼顧問を委嘱され、病院人事の一切を任された。昭和2年5月25日に開院した。

鈴木鎮一先生



明治33年(1898)に名古屋市に生まれる。父政吉は日本における最初のバイオリンを製作(明治21年)、名古屋に鈴木バイオリン工場を設立した。大正10年にドイツ・ベルリンに渡りバイオリンを学び、アインシュタインとも知り合う。昭和21年に松本市下横田に松本音楽院を開設、院長に就任。後に、才能教育研究会の前身である『全国幼児教育同志会』を結成。昭和23年同志会を『[才能教育研究会](#)』と改称。英サンデータイムス紙の特集『[20世紀をつくった1000人](#)』の中の1人に選ばれる。1000人中、[日本人は11人](#)。平成10年永眠、享年99歳。

天白神社近くでの記念撮影



安原地区歴史研究会のメンバーです。現在、メンバーは19名で活動しています。

END

《参考文献 『安原地区の歴史探訪』 安原地区歴史研究会》